

# 『松陰中納言物語』の成立

## 序

『松陰中納言物語』は、王朝物語の系列に属するといわれる、五巻からなる作品である。

その成立時期については、『無名草子』『風葉和歌集』などにその書名が見えず、本書の伝本四本の中（二本）に、

○建徳二年辛亥六月南陽伯（花押）

の奥書が記されていることから、通説では一応鎌倉末〜南北朝期とされている。しかしその一方で、室町期にまで下るのではないかとの疑いも早くから出されており、藤田徳太郎（伝三）氏は、

○著作年時については、内容文章の上から云へば、私は、どうも室町期の作品のやうな気がしてならない

## 田淵福子

と、その印象を述べられ、また古典文庫本巻末に付された大野木克豐（伝三）氏の調査においても、

○文章ハ中古弊ヲ模シタレトモ詞遣後世風ナルモノ交リ語格上ノ誤少カラス是此種ノ物語ノ常トイヘトモけいす（啓）

トイフ詞ヲ帝ニ對シテモ臣下ニ對シテモ用キルカ如キハ謬

妄ノ甚シキモノトイフヘシ 此書ノ作者年代明ナラサレト

モ思フニ室町季世ヨ上ルコトナカラシ

としておられる。また、近年になって、小木喬（伝三）氏が、近世にまで引き下げて考えておられるようであり、注目される。

このように、本書の成立については、特にその文章の面から、通説の範囲に対する疑問が投げ掛けられているのであるが、従来の研究においては、いまだ本書の成立を室町以後にまで引き

下げるに足る十分な論拠が示されておらず、なお判然とした結論が出ないままの状態にある、そこで、本稿では、『松陰中納言物語』の文章の特徴を、

一、文末の助動詞

二、係結び

三、已然形終止

の三点から検討し、この物語の成立時期について考察してみた。

(注一) 本書の伝本としては、①尊経閣文庫本 ②天理図書館蔵竹柏園本 ③天理図書館蔵西荘文庫本 ④東北大学蔵本、の四本の存在が知られているが、その中③④の二本にこの奥書が記されている。また、戦災により焼失した名古屋図書館蔵本にもこの奥書の存したことが、同本の昭和初期転写本(国文学研究資料館蔵)によりわかる。

(注二) 『日本小説史論』(昭14・11至文堂刊)二四九頁。

(注三) 古典文庫第二八四冊『松陰中納言物語 上冊』一四二頁。

(注四) 『散逸物語の研究 平安・鎌倉時代編』(昭48・2 笠間書院刊)二〇頁。

一 文末の助動詞について

『松陰中納言物語』においては、文末に、

○やがてりうくはえんを舞給へり。こなたにては、物しづかにわたらせ給へば、きのふにはまさりてきこえさせ給へり。

ろく給はらんよりはとて、三位になさせ給へり。(古典文庫第二八九冊『松陰中納言物語 翻刻篇』一三〇頁、以下本物語からの引用は同書による。傍線は筆者、以下同然)

のように、所謂完了・存続の助動詞「り」が多く認められ、「物語る」助動詞といわれる「けり」は非常に少ない。「けり」叙述が基調であるとされる物語のなかにあつて、本書においては何故こうした表現方法が採られたのであろうか。

その問題に触れる前に、まず順序として、中古・中世の物語文学において文末表現がどのように行なわれていたのか、そのおおよその所を把握しておかなければならない。

表一〇は、王朝物語の系列に属する作品と御伽草子について、会話・心中思惟・書面の部分を除いた、所謂「地の文」の文末に用いられた助動詞の種類とその用例数を調査し、その結果を一覧表にまとめたものである。作品の配列はおおよそ成立順とし、成立年代の明らかでないものについては、通説に従った。また、各々の作品について、破線で区切った上段は用例数を表わし、下段は、上段に示した用例数が当該作品中の文末助

〈表一〉

いはでこのぶ	我身にたるとる姫君	山路の露	風に紅葉	恋路ゆかしき大狩	八重葎	兵部噺物語	錦木物語	別本八重葎	雲隠六帖	松陰中納言物語	夢の通ひ路	御伽草子
1	18	1	1	4	1	1	0	1	0	1	15	0
0.5	2.2	1.2	0.5	0.9	0.8	1.6	0	3.1	0	0.5	1.7	0
9	97	6	29	42	18	22	41	3	5	18	162	19
4.2	11.9	7.3	14.6	9.4	14.2	34.3	8.1	9.4	7.8	8.4	19.0	1.8
8	52	10	28	41	8	0	39	2	1	3	69	77
3.7	6.4	12.2	14.1	9.1	6.3	0	7.8	28.2	1.6	1.4	8.1	7.1
20	44	13	33	51	13	2	32	5	1	126	181	58
9.2	5.4	15.9	16.7	11.4	10.3	3.1	6.3	15.6	1.6	58.9	21.2	5.4
10	11	2	1	6	1	0	2	0	5	4	2	2
4.6	1.4	2.4	0.5	1.3	0.8	0	0.4	0	7.8	1.9	0.2	0.2
74	143	16	40	123	36	14	313	10	35	8	208	672
34.2	17.5	19.5	20.3	27.4	28.5	21.9	62.1	31.3	54.6	3.7	24.3	62.1
24	69	6	5	28	5	1	2	0	1	2	17	5
11.1	8.5	7.3	2.5	6.2	4.0	1.6	0.4	0	1.6	0.9	2.0	0.5
1	6	0	0	0	0	1	1	0	0	8	1	3
0.5	0.7	0	0	0	0	1.6	0.2	0	0	3.7	0.1	0.3
3	9	0	1	0	0	0	2	1	2	0	6	0
1.4	1.1	0	0.5	0	0	0	0.4	3.1	3.1	0	0.7	0
2	127	12	11	38	15	4	3	0	2	4	40	19
0.9	15.6	14.6	5.6	8.5	11.9	6.2	0.6	0	3.1	1.9	4.7	1.8
9	19	3	6	15	2	0	0	1	0	3	26	0
4.2	2.3	3.7	3.0	3.3	1.7	0	0	3.1	0	1.4	3.0	0
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	4
0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.5	0.4
43	115	8	13	31	20	11	37	0	8	13	53	36
19.9	14.1	9.8	6.6	6.9	15.8	17.2	7.3	0	12.5	6.1	6.2	3.4
9	58	3	25	53	4	8	20	1	2	10	65	176
4.2	7.1	3.7	12.6	11.8	3.2	12.5	4.0	3.1	3.1	4.7	7.6	16.3
3	36	0	3	14	1	0	7	0	0	8	2	4
1.4	4.4	0	1.5	3.1	0.8	0	1.4	0	0	3.7	0.2	0.4
0	4	0	2	1	2	0	3	0	1	3	1	7
0	0.5	0	1.0	0.2	1.7	0	0.6	0	1.6	1.4	0.1	0.7
0	7	2	0	2	0	0	2	1	1	3	3	0
0	0.9	2.4	0	0.5	0	0	0.4	3.1	1.6	1.4	0.4	0
216	815	82	198	450	127	64	504	32	64	214	855	1082
100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

作品 文 末 助 詞	竹 取 物 語	落 窪 物 語	源 氏 物 語	夜 の 寝 覚	浜 松 中 納 言 物 語	堤 中 納 言 物 語	松 浦 宮 物 語	有 明 の 別 れ	と り か へ ば や 物 語	あ さ ら が 露	風 に つ れ な き	石 清 水 物 語	
													数
つ	数	7	43	102	17	2	2	7	15	10	10	1	14
	%	4.2	6.4	2.0	3.5	0.5	1.2	3.6	2.8	1.7	6.4	0.5	2.6
ぬ	数	32	148	519	70	69	24	39	55	63	38	13	68
	%	19.3	22.0	10.0	14.3	17.8	14.0	20.1	10.1	10.8	24.5	6.8	12.7
たり	数	26	100	686	92	42	26	17	34	41	19	13	56
	%	15.7	14.9	13.3	18.9	10.9	15.1	8.8	6.3	7.1	12.3	6.8	10.4
り	数	27	102	974	22	34	20	9	57	46	9	41	43
	%	16.3	15.2	18.9	4.5	8.3	11.6	4.6	10.5	7.9	5.8	21.4	8.0
き	数	0	1	29	3	6	3	1	4	2	0	4	2
	%	0	0.1	0.6	0.6	1.6	1.7	0.5	0.7	0.3	0	2.1	0.4
けり	数	41	144	1215	58	68	30	29	41	116	24	40	155
	%	24.7	21.4	23.5	11.9	17.6	17.5	15.0	7.5	19.9	15.5	20.8	28.9
む	数	0	10	87	17	23	7	11	43	29	4	15	30
	%	0	1.5	1.7	3.5	6.0	4.1	5.7	7.9	5.0	2.6	7.8	5.6
らむ	数	0	0	4	0	1	0	1	1	0	0	0	0
	%	0	0	0.1	0	0.3	0	0.5	0.2	0	0	0	0
けむ	数	0	2	24	2	0	0	2	0	5	0	0	7
	%	0	0.3	0.5	0.3	0	0	1.0	0	0.9	0	0	1.3
べし	数	0	23	184	20	19	15	9	87	42	9	16	34
	%	0	3.5	3.6	2.7	4.9	8.7	4.6	16.0	7.2	5.8	8.3	6.3
めり	数	0	0	139	7	4	9	0	22	14	0	2	10
	%	0	0	2.7	0.9	1.1	5.2	0	4.1	2.4	0	1.0	1.8
じ	数	0	1	2	0	1	0	0	0	0	0	0	1
	%	0	0.1	—	0	0.3	0	0	0	0	0	0	0.2
ザ	数	18	65	594	134	63	16	46	79	142	15	20	32
	%	10.8	9.7	11.5	27.5	16.3	9.3	23.7	14.5	24.4	9.7	10.4	5.9
なり	数	7	16	338	31	25	12	12	44	44	26	13	59
	%	4.2	2.4	6.5	6.4	6.5	7.0	6.2	8.1	7.5	16.8	6.8	11.0
る	数	1	4	149	13	13	3	6	50	20	1	12	15
	%	0.6	0.6	2.9	2.7	3.4	1.7	3.1	9.2	3.4	0.6	6.3	2.8
らる	数	1	2	75	8	3	0	3	9	7	0	1	3
	%	0.6	0.3	1.5	1.6	0.8	0	1.6	1.7	1.2	0	0.5	0.6
その他	数	6	11	36	8	14	5	2	2	2	0	1	8
	%	3.6	1.6	0.7	1.6	3.7	2.9	1.0	0.4	0.3	0	0.5	1.5
合計	数	166	672	5157	488	387	172	194	543	583	155	192	537
	%	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

※脚血草子は、所謂澁川版二十三編についての調査である。  
 本表を作成するにあたっては、大系・全集・桂宮本叢書等所収の本文を調査した。

動詞総数に占める割合（以下、使用率と称す）を、パーセンテージで表したものである。なお、諸本間の本文の異同が著しい『うつほ物語』と『狭衣物語』は、あえて調査の対象から除外した。

この表によれば、過去、完了系の助動詞といわれる「き」「けり」「つ」「ぬ」「たり」「り」、並びに断定の「なり」、打消の「ず」の使用率の高ことが共通して認められる。これは、調査対象が物語の地の文であることからすれば当然の結果であるが、これをさらに詳しく見ると、個々の作品によって、これら助動詞の使用率にかなり変動のあることがわかる。

そこで、これらの助動詞の中から、特に問題を含むと思われる過去・完了系の助動詞六種のみを抜き出し、その作品毎の使用率の推移を折れ線グラフに表したのが、表二である。

この表を一見して、まず気づくのは、平安物語においては、各助動詞の使用率が比較的接近しているのに対して、後期物語では、時代が下るほどこれらの使用率の差が大きくなり、特定の、二種の助動詞——特に過去・回想の助動詞と言われる「けり」——が集中して用いられる傾向が現われてくるということである。

「けり」が、前期物語の文章中において果たしていた役割は、

阪倉篤義<sup>三〇</sup>氏が、

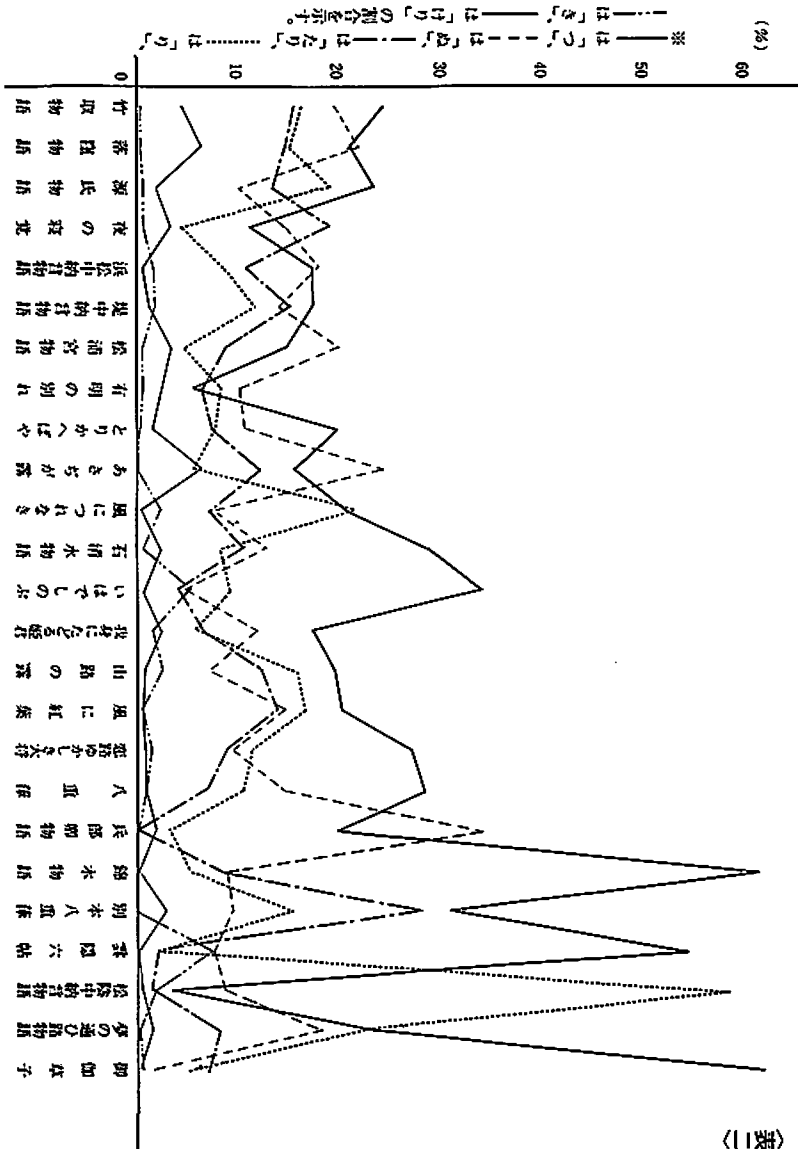
○「けり」は、むしろ過去の（あるいは過去からの）事象を、ある程度客観視して、これを常に現在との關聯といふ立場においてながめようとする態度を示すと、言つてもよからう。

（中路）「なむ……ける」といふ形を持った表現は、いはゆる「物語る」といふ敘述の様式にとつて、正にふさはしいものであり得たのである。

と述べられたように、「物語る」態度を示すということであった。かかる性質を有するが故に、この語が「歌語り」の文体を受け継いだ『伊勢物語』や『大和物語』の文末に頻用され、或いは『竹取物語』の章段の切れ目に配されたことは、すでに指摘のあるところである。事実、表には掲げなかったが、私の調査によれば、『伊勢物語』における文末の「けり」の使用率は、実に七五・二%を占めており、また『竹取物語』についても、表一・二に示したように、以後の平安物語に比較してその使用率は高い。

ところが、これら二作品の要素を受け継いだとされる『源氏物語』以後、平安末の『有明の別れ』に至るまで、「けり」の使用率は低下して行く。『源氏物語』において、この「けり叙述」が減少した原因については、作り物語を「事実めかす」<sup>三二</sup>必

(表二)



要からであるとか、或いは、和文の発達により文末を多様に語る態度が生まれたためであるとかいった説明がなされているようであるが、そうした作品、作者側の事情が、平安末期頃まで続いたことを、この調査結果は示しているといえよう。糸井通浩氏が、

○伊勢物語の文章の中に、大和物語へと変貌していった要素と、源氏物語へと発展していった要素と両方がみいだせる  
と判断しているのであるが、源氏物語へと発展していった要素こそ、「けり」叙述から脱皮の方向、つまりは終止形動詞の現出する方向にあった。それが物語の文体の創造につながるが、「けり」叙述の伝統は、大和物語から説話文学へと展開していったと考える。

と述べられたように、「けり」叙述は王朝物語を離れ、説話文学の世界に生き続けたのであった。

ところが、鎌倉期に入ると、再び王朝物語においても頻用されるようになる。

一旦は「けり」叙述から離れた物語の文章が何故再び「けり」に収束していったのか、換言すれば、何故、物語は「自由に語る」ことをしなくなったのであろうか。

「けり」叙述復活の原因としてまず考えられるのは、過去・

完了系の助動詞相互の意味の混乱であろう。よく引かれる例に、『詠歌大概註』において、

○道の辺に清水流るる柳かげしはしとてこそ立ち止まりつれの「つれ」に、「けれにても心同じ」と注されたものなどがあるが、このように、助動詞の意味の区別が、中世において既に曖昧になっていたことは周知の通りである。また、『夢の通ひ路物語』の、

○二七日にうつり来るも、いそがぬ月日とあやなふ浅ましようふしぎに残る命ぞと、かたみにおほしつゞけけり。

に用いられた「けり」は、従来の物語文なら「たり」とあるべき個所である。ここにおける「けり」は、よくいわれるような「事柄を現在の時点において認識する」などといった意味ではなく、明らかに存続の「たり」の代りに用いられている。こうした混乱期にはいると、口語では「き」「けり」が衰え、代つて「たり」が優勢になったことは既に明らかにされているが、前掲の調査結果を見る限り、文語はその逆の方向に流れたようである。口語が「たり(た)」統一の方向へと向かい、「たり」が口語的な性格を強めたために、文語は「擬古」の技法として、物語叙述に伝統のある「けり」を選択したものであろうか。ともかく、これらの助動詞を使い分け、「自由に語る」ことがも

はや困難になつていたことは明らかである。

また、後期物語の内容の変化も、当然関わつてくるであろう。物語の内容を「事実めかす」必要から、「源氏物語」等において「けり」の減少をみた、という指摘のあることは前に述べた。現に、平安最盛期の物語の中では、心理的に深く掘り下げられた『夜の寝覚』において特にその使用率が低く、この事實は右の指摘の裏付けになると思われる。一方、鎌倉物語にはこのような心理小説が見られなくなり、狂人の登場や倫理の乱れといった設定の新奇さが物語のプロットを支えるようになる。仏教的色彩も濃厚になり、改作本『夜寝覚』のように、『東大寺要録』所収の石山寺縁起譚をそっくり和文に書き替えたような例<sup>16</sup>は、この時代の物語全体の傾向を象徴するものであるといえよう。このように、鎌倉物語は平安物語とは質を異にしている。それは、竹取物語的伝承の世界へ、或いは大和物語的説話の世界への回帰といったものではなく、中世説話の世界へと近づく方向での変質であるといえよう。

さらにまた、「王朝」物語という世界の捉え方自体にも、平安・鎌倉の物語作者の間に相違があつたであろうことも、考慮に入れなければならない。前期物語においては、「今は昔」「いづれの御時にか」と、物語の時間を過去に設定しながらも、そ

の内容は当時の現実を反映した、「事実めかした」ものであつた。『はなだの女御』や『逢坂越えぬ桶中納言』に指摘される「今日性」「時事性」<sup>17</sup>は、そうした態度の発展した形ではないかと思われる。平安と鎌倉初期の物語作者や読者にとつて、王朝物語の世界は「日常」であつた。しかし、鎌倉中期以後、貴族の没落の中にあつて、そうした世界が「日常」と遊離していったであろうことは、想像に難くない。王朝物語的世界は、「過去・回想」の助動詞「けり」を以て叙述するのに対応しい世界として、当時の作者（また読者）に受け取られるようになっていたのではあるまいか。後期物語の中でも成立の遅い『夢の通ひ路物語』は、狭衣的な起筆を用いず、御伽草子的に「中ごろ」と書き起こされているが、このことも、王朝物語を「過去」のものとして「回想」しようとする作者の態度を物語っているのではないかと思われるのである。

以上述べたような理由により、鎌倉中期以後の物語は、物語叙述に伝統のある「けり」に再び頼らざるを得ない状態にあつたと考えられるのであり、表二に表われた結果は単なる偶然ではない。以後、江戸時代の石川雅望や上田秋成らの擬古文に至るまで、専ら「けり」叙述が行なわれるようになるのである。ところが、この表の『松陰中納言物語』の項を見ると、明ら



かに他の物語に見える傾向とは異なっている。即ち、「けり」の使用率は著しく低く、逆に「り」の使用率が群を抜いて高いのである。他の物語においては、「り」は既に平安中期から衰退しており、決して物語叙述の上に伝統のある助動詞ではない。本書においてのみ、こうした現象が見えるのは何故であろうか。

「り」は、漢文訓読文においては用例数も多く、様々な助動詞に接続するのに対して、和文においては、「給ふ」に接続する例がその大半を占める、といったことがすでに指摘されているが、この章の冒頭に掲げた例からも分かるように、『松陰中納言物語』においても「給ふ」に接続する例が圧倒的で、その文章が訓読文の影響によるものとは思えない。しかし同時に、中世(或いは近世)の王朝物語系列の作品は、別名「擬古物語」というその名が示すように、古えの文章にその範を求めたもので

〈表三〉

作品	源氏物語抜書抄		幼な源氏	
	数	%	数	%
つ	0	0	0	0
	0	0	0	0
ぬ	85	7.8	16	3.4
	7.8	3.4	3.4	16
たり	215	19.7	98	20.8
	19.7	20.8	20.8	98
り	254	23.3	157	33.3
	23.3	33.3	33.3	157
さ	2	0.2	0	0
	0.2	0	0	0
けり	142	13.0	45	9.6
	13.0	9.6	9.6	45
む	1	0.1	1	0.2
	0.1	0.2	0.2	1
らむ	0	0	0	0
	0	0	0	0
けむ	0	0	0	0
	0	0	0	0
べし	35	3.2	5	1.1
	3.2	1.1	1.1	5
めり	3	0.3	0	0
	0.3	0	0	0
じ	0	0	0	0
	0	0	0	0
ず	39	3.6	27	5.7
	3.6	5.7	5.7	27
なり	302	27.7	89	18.9
	27.7	18.9	18.9	89
る	5	0.5	21	4.5
	0.5	4.5	4.5	21
らる	5	0.5	12	2.5
	0.5	2.5	2.5	12
その他	1	0.1	0	0
	0.1	0	0	0
合計	1089	100.0	471	100.0
	100.0	100.0	100.0	471

※「源氏物語抜書抄」の本文は古典文庫第四〇四冊、「幼な源氏」の本文は、『近世文芸叢書擬物語』(明四四・八国書刊行会)所収のものによる。

ある。その中で、本書のみが、全く他の文体からの影響を受けずに、こうした叙述方法を用いた、ということもまた考え難いのである。純粹な和文でありながら、その伝統に無い「り」を多く用いる、といった本書の文体は、何の影響によるものであろうか。今まで調査を行ってきた作品群の他に、物語のジャンルに属するもう一つの流れとして、中世以後の源氏物語梗概本がある。これらは連歌の方面で重んじられたものであるが、その本文を見ると、『松陰中納言物語』のように、叙述の基調に「り」が用いられていることがわかる。そこで、〈表三〉は、源氏梗概本「源氏物語抜書抄」「幼源氏」の二作品について、〈表一〉と同じ方法で調査を行ない、結果を表にしたものである。このように、梗概本のジャンルにおいて「り」叙述が行なわれているという事実は、この助動詞の意味やその使われ方を知

〈表四〉

作品 文助詞	手		統 緒 久 保 物 語		近 江 縣 物 語		梅 の 宴		花 の 立 枝	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
つ	0	0	10	10.9	21	6.3	1	0.6	3	1.1
	5	20.8	4	4.3	44	13.1	6	3.3	9	3.2
たり	3	12.5	13	14.1	22	6.6	32	17.7	60	21.4
	0	0	9	9.8	2	0.6	57	31.5	84	30.0
り	0	0	0	0	1	0.3	13	7.2	19	6.8
	10	41.6	35	38.0	169	50.6	10	5.5	36	12.9
けり	1	4.2	0	0	1	0.3	0	0	0	0
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
らむ	0	0	0	0	1	0.3	1	0.6	0	0
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
けむ	1	4.2	2	2.2	5	1.5	5	2.8	5	1.8
	1	4.2	1	1.1	3	0.9	7	3.9	8	2.9
べし	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	3	12.5	11	12.0	38	11.4	14	7.7	9	3.2
めり	0	0	6	6.5	21	6.3	12	6.6	31	11.1
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
じ	0	0	0	0	1	0.3	10	5.5	13	4.6
	0	0	0	0	0	0	3	1.7	2	0.7
ザ	0	0	1	1.1	5	1.5	10	5.5	1	0.3
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
なり	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
る	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
らる	0	0	1	1.1	5	1.5	10	5.5	1	0.3
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	24	100.0	92	100.0	334	100.0	181	100.0	280	100.0
合計	24	100.0	92	100.0	334	100.0	181	100.0	280	100.0
	24	100.0	92	100.0	334	100.0	181	100.0	280	100.0

る上において、示唆的であるといえよう。糸井通浩<sup>(10)</sup>氏は、古今集詞書における「けり」と「り」の意味の相違について、前者は「そうした事象が存在することになった事情を説明する」のに対して、後者は「そうした事象の存在自体を説明する」のである、としておられる。『抜書抄』等における文末の「り」の類出も、「そうした事象」、即ち『源氏物語』という一個の作品のストーリーの、「存在自体を説明する」ことが梗概本の目的であることを考えれば、むしろ当然であるといえよう。糸井氏はさらに、両者の違いを、「素材の世界を認識する言語主体

の立場にある助動詞」と「素材の世界の側立つ助動詞」との違いである、とも説かれた。即ち、「けり」の場合には素材と読み手との間に言語主体の主観が介在するのに対して、「り」の場合には言語主体の主観とは無関係に、素材の世界が読み手に伝達されるのである。すでに完成している物語の荒筋を説明するためには、主観はむしろ排除されなければならない。梗概本にとつては、「り」こそが、その叙述に相応しい助動詞であったと言えよう。

さて、こうした梗概本の影響は、以後の物語にどのように現

われているであらうか。△表四▽は、連歌師で物語も多く著した荒木田麗女の二作品——『梅の宴』『花の立枝』——と、宣長・雅望らの三作品——『手枕』『続落久保物語』『近江縣物語』——について、△表一▽と同様の調査を行なった結果を示したものである。この表を見ると、麗女の手になる物語は「り」叙述、他の三作品は「けり」叙述をとっていることが分る。ここには掲げなかったが、秋成等の文章も皆「けり」叙述であり、麗女のような文体は江戸期の擬古文の中でも特殊である。彼女のこうした文体は、彼女が源氏梗概本を重んじた連歌師の一人であったことと関係があるのではなからうか。稻賀敬二<sup>(二)</sup>氏が、

○連歌の世界で再生される『源氏物語』は、直接に『源氏』原典を精読した結果ではなく、このような梗概書による所が大きかったと考えられる。

と述べられたが、このように梗概本を原典と同様に扱っていたとすれば、そうした連歌師達の間で創作された物語の文体に、梗概本からの影響が現われるのは、むしろ自然であるといえるのではなからうか。

以上述べてきたように、『松蔭中納言物語』に見られる「り」を基調とした叙述は、物語一般においては見られず、わずかに

源氏物語梗概本と、その周辺の連歌関係の物語には見られることがわかった。

そのことをもって直ちに、本物語とこうした梗概本との影響関係を云々することは出来ないが、こうした「り」叙述の文体が、果たして通説でいわれるような鎌倉末と南北朝の間に生まれ得たものか、やはり疑問を抱かざるを得ないのである。

(注一) 阪倉篤義氏「竹取物語における『文體』の問題」(『国語・国文』第二六七号、昭三一年)

(注二) 清水好子氏「物語の文体」(『国語・国文』第一八卷四号、昭二四年)

(注三) 『講座日本語学7 文体1』(昭五7・8 明治書院刊)「和文の文体史」の項、一一一頁。

(注四) 糸井通浩氏「『けり』の文体論的試論——古今集詞書と伊勢物語の文章——」(『王朝』第四冊)

(注五) 『夢の通ひ路物語』(福武書店刊、昭五〇・三)九二頁一行目。

(注六) 此島正年氏「日本文法史論説」(昭五4・8 桜楓社刊)九六頁等。

(注七) 三谷栄一氏「物語史の研究」(昭42・7 有精堂刊)第五編第一章「物語の行方」五一頁等の指摘による。

(注八) シンボジウム「物語の視界」(『国文学解釈と鑑賞』昭56・1)九九頁における鈴木一雄氏の御発言。

(注九) 築島裕氏「平安時代の漢文訓読語につきての研究」(昭38東京大学出版会)

(注一〇) (注四) 参照。

〔注一〕 岩波書店刊『日本古典文学大辞典』、「源氏小鏡」の項。

## 二 係結びについて

係結びの用法を通して一つの作品の文体を解明し、その上に立って作品自体を論じる、といった研究方法は、物語・説話・日記・随筆文学など、あらゆるジャンルに属する主要な作品について、多く用いられてきたようである。しかし、所謂「後期物語」、即ち鎌倉・室町期の王朝物語については、そうした研究方法は、全くといってよいほど採られていない。そもそも、後期物語一般において係結びがどのように行なわれていたか、という最も基本的な問題が明らかにされていないのである。

そこで、本章では、『松陰中納言物語』に見られる強調表現の「ぞ」「なむ」「こそ」の係結びの用法を通して、本物語の文章の特徴を明らかにし、その上で成立の問題にも触れてみたい。

『松陰中納言物語』には、

○「源大納言殿こそいかめしきすくせにてはありけれ。やがて大将をこそかけ給ふらめ。御子の少将もきのふ中将にうつり給ふとこそ。(後略)」（一九頁六行目）

のように、係助詞「こそ」が頻出する。

所謂強調表現に用いられる係助詞「ぞ」「なむ」「こそ」の衰退の過程において、中世前期に「なむ」の衰退、中世後期に「ぞ」の減少とそれに伴う「こそ」の比重の増大、といった現象が見られることは、国語史の通説となっているようであるが、かかる現象は物語の文章史においても認められるものであろうか。そして、もし仮にそうだとすれば、本書における係助詞の用法は、それとどのように関わっているであろうか。

まず順序として、これら三種の係助詞の大まかな使用状況を把握するため、平安・室町期に至る主要な物語におけるそれらの使用度数と、その使用比率を調査し、その結果を一覧表にしたものが△表五▽、使用率を見易いように折れ線グラフにまとめたものが△表六▽である。なお、参考のため、松島典雄<sup>〔2〕</sup>氏が仮名草子についての調査を行なわれたものを、整理してつけ加えさせて戴いた。

この表を見ると、『源氏物語』においてはほぼ均等に用いられていた三種の係助詞が、以後になるとそのバランスを崩していることがわかる。平安末の『浜松中納言物語』以後、「なむ」が急速に衰退し、「ぞ」「こそ」の比重がそれに伴い変化したものである。この傾向は、ちょうど『風葉和歌集』成立前後になつたとされる『我身にたどる姫君』まで続いているが、その後、

〔表五〕

作 品		ぞ	なむ	こそ	計
源氏物語	数	1682	1816	1893	5391
	%	31.2	33.7	35.1	100.0
浜松中納言物語	数	234	100	339	673
	%	34.8	14.9	50.3	100.0
堤中納言物語	数	73	41	92	206
	%	35.4	19.9	44.7	100.0
松浦宮物語	数	86	21	34	141
	%	61.0	14.9	24.1	100.0
有明の別れ	数	409	37	133	579
	%	70.6	6.4	23.0	100.0
とりかへばや物語	数	355	93	289	737
	%	48.2	12.6	39.2	100.0
あさちが露	数	111	25	90	226
	%	49.1	11.1	39.8	100.0
風につれなき	数	74	3	41	118
	%	62.7	2.5	34.8	100.0
我身にたどる姫君	数	601	69	183	853
	%	70.5	8.1	21.4	100.0
山路の露	数	30	25	56	111
	%	27.0	22.5	50.5	100.0
風に紅葉	数	155	41	92	288
	%	53.8	14.2	32.0	100.0
恋路ゆかしき大将	数	196	16	158	370
	%	53.0	4.3	42.7	100.0
八重俵	数	58	34	73	165
	%	35.2	20.6	44.2	100.0
兵部卿物語	数	44	15	36	95
	%	46.3	15.8	37.9	100.0
雲隠六帖	数	54	10	29	93
	%	58.1	10.8	31.1	100.0
松陰中納言物語	数	58	2	401	461
	%	12.6	0.4	87.0	100.0
夢の通ひ路物語	数	270	123	300	693
	%	39.0	17.7	43.3	100.0
御伽草子	数	478	20	247	733
	%	63.2	3.1	33.7	100.0
仮名草子	数	15	2	50	67
	%	22.4	3.0	74.6	100.0

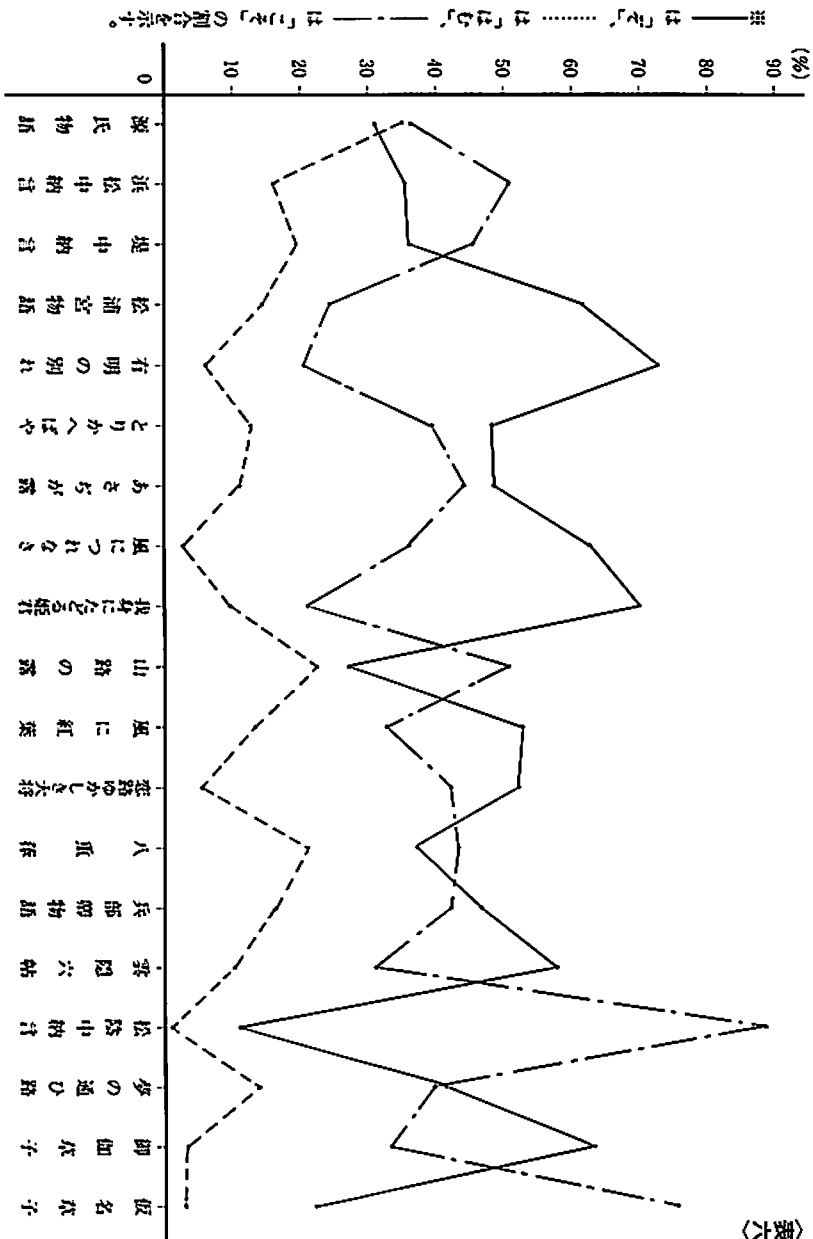
※調査にあたっては、各種索引及び全書、全集・大系・研究書所収本文等を利用した。  
%は三助詞間相互の比率である

鎌倉末期の成立かとされる「山路の露」あたりから「こそ」は増加、「ぞ」は減少といった傾向が認められるようになる。このように、王朝物語の分野においても、国語史の通説にほぼ一致した係助詞衰退の過程が認められるのである。

かかる事実を踏まえた上で、『松陰中納言物語』に注目すると、その係助詞の用法は、前章で述べた文末表現と同様、極めて特殊であることがわかる。「ぞ」は既に衰えており、かわつ

て「こそ」が実に九割近くに達しているのである。係助詞のこうした使用状況は、王朝物語よりもむしろ仮名草子に近いと言えよう。

以上、「ぞ」「なむ」「こそ」の使用状況を、その用例数から捉え、本書の文体の特異性を指摘したのであるが、次に、それら「係り」に対する「結び」の用法に注目し、より詳しい検討を行なってみたい。



△表七は、『松浦宮物語』から御伽草子に至る主要な物語

八一頁(三行目)

十四作品について、こられ係助詞に対する結びの用法を調査した結果をまとめたものである。まずこの表全体を見ると、やはり当然のことながら、時代の下降に伴い、結びが破格を取る割合は高くなっている。これは、「なむ」において特に著しい。

のように、歌の導入の爲の慣用的用法となっており、双方とも、数の上では正格の比率が高いものの、その用法は実質的な衰退を示しているといえよう。

「こそ」にもそういった傾向が幾分見られるものの、「なむ」

なお、本題からは外れるが、「ぞ」「なむ」「こそ」の全ての結びにおいて、約半数が破格を示している。「兵部卿物語」は注目に値する。この物語は、山岸徳平氏(註)がその成立を、

「ぞ」ほど明確でないのは、この助詞の結びに対する拘束力が、中世の時点ではまだかなり強かつたためであると思われる。また、御伽草子が「ぞ」「なむ」に関して王朝物語よりも正格の割合が高く、一見係結びの整合性を保っているかのようなのであるが、これは、係助詞の用法が狭まった爲のものであると考えられる。御伽草子における「ぞ」の約半数は、

○詞違ひ文体共に鎌倉期のものに相違ない。今風葉集以後で鎌倉末期と見る。

○さて、おのれは、いかやうにして過ぐるぞ。(小学館日本

とされたものの、最近になって辛島正雄氏(註)が、『徒然草』や『山路の露』などの影響が見られることや、幾つかの特殊な語句が存在することなどから、その説に疑問を呈されたものである。この点からみて、前述のような係結びの用法が認められることは興味深い。前章において文末表現する調査を行なった際にも、他の物語とはやや異なった傾向が見受けられたのであるが、その他敬語法にも誤りが見られるなど、確かに鎌倉末期のものとするには不審な点が多い。この物語の成立時期にも、再

のような文末用法であり、それ以外の語においても、結びの語が「けり」など特定のものに偏っているのである。また「なむ」についても、用例二十例の全てが、

○ややしはしありてかくなん、

検討を加える余地が多分に残されているといえよう。

野の末の道踏み分けていづくとも

さて、この表における『松陰中納言物語』を見ると、「ぞ」

さして行きなん身とは思はず(同右、『鉢かつき』)

「なむ」については破格の割合がかなり進んでおり、南北朝

〔表七〕①「ぜ」の結び

作品	品詞	動詞・補助動詞	形容詞	形容動詞	助詞	名詞	助動詞													省略	文木	消上	正破格別計	正破格比率	合計
							つ	ぬ	たり	けり	む	らむ	む	めり	べし	なり	ず	その他							
松浦宮物語	正破	23	14	2			0	1	2	13	0	0	1	0	2	3	2	6	0	6	75	87.2	86		
	破	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	11	12.8			
有明の別れ	正破	103	39	13			1	10	12	16	0	1	2	13	25	11	15	59	8	41	369	90.2	409		
	破	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	38	40	9.8			
あきらが露	正破	28	6	0			0	1	2	12	0	0	0	0	1	3	0	5	9	30	97	87.4	111		
	破	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	12	14	12.6			
風につれなき	正破	27	7	0			0	0	1	14	0	0	1	0	2	3	0	8	0	4	67	90.5	74		
	破	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	7	9.5			
我身にたどる感君	正破	147	66	2			5	13	16	66	0	1	7	7	31	13	9	60	13	92	548	91.2	601		
	破	1	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	49	53	8.8			
山路の露	正破	3	1	0			1	1	0	2	0	1	0	0	2	0	0	1	3	8	23	76.7	30		
	破	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	6	7	23.7			
風に紅葉	正破	46	14	0			0	4	6	16	0	1	1	1	6	2	3	9	4	27	140	90.3	155		
	破	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	14	15	9.7			
窓路ゆかし大付	正破	19	20	2			0	2	3	61	0	1	4	5	7	2	3	11	2	35	177	90.3	196		
	破	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	1	1	0	1	0	1	14	19	9.7			
八重藤	正破	10	2	0			0	0	2	10	0	1	2	0	2	0	0	1	1	20	51	87.9	58		
	破	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	7	12.1			
兵部御物語	正破	4	2	0			0	3	0	4	2	0	1	0	2	0	0	1	2	5	26	59.1	44		
	破	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	17	18	40.9			
露隠六帖	正破	10	0	0			0	0	1	15	0	0	0	1	1	1	1	1	6	10	47	82.5	54		
	破	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	5	7	17.5			
松陰中納言物語	正破	6	3	0			0	0	0	2	0	1	5	0	1	0	0	5	0	14	37	63.8	58		
	破	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	4	6	1	0	2	0	6	0	1	21	36.2			
夢の通り路	正破	14	5	1			0	2	0	3	0	1	9	1	0	0	1	6	10	127	180	66.7	270		
	破	3	10	0	1	0	1	11	2	16	0	1	10	0	1	0	0	12	0	22	90	33.3			
御伽草子	正破	49	15	1			0	0	1	172	0	2	2	0	0	0	0	0	4	200	446	93.3	478		
	破	2	2	1	1	0	0	0	1	9	0	0	0	0	0	2	1	0	0	13	32	6.7			
合計	正破	489	194	21			7	37	46	406	2	10	35	28	82	38	34	173	62	619	2283	87.0	2624		
	破	9	13	1	4	2	2	12	4	28	0	5	17	1	2	6	1	21	0	213	341	13.0			



作品	品詞	動詞 補助	形容詞	形容動詞	助詞	名詞	助 動 詞													省略	文末	消去	正破格別計	正破格比率	合計
							っ	ぬ	たり	けり	けむ	らむ	む	めり	べし	なり	ず	その他							
松浦宮物語	正破	1	2	0			0	2	0	4	0	0	0	0	4	0	0	0	6			19	90.5	21	
	破	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			2	2	9.5		
有明の別れ	正破	14	3	0			3	1	0	2	0	0	0	4	0	1	3	5			36	97.3	37		
	破	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			1	1	2.7			
あさぢが露	正破	10	0	0			0	1	0	0	0	0	1	0	2	0	0	5			20	80.0	25		
	破	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			3	5	20.0			
風につれなき	正破	1	0	0			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			2	66.7	3		
	破	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			1	1	33.3			
我身にたどる恋程	正破	11	3	0			3	3	1	4	0	0	0	0	7	1	2	4	27		66	95.7	69		
	破	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			3	3	4.3			
山路の露	正破	5	5	0			0	0	0	2	0	0	0	1	0	0	2	6			21	84.0	25		
	破	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			4	4	16.0			
風に紅葉	正破	13	0	0			0	1	0	1	0	0	0	3	0	0	2	17			37	90.2	41		
	破	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			4	4	9.8			
恋路ゆかしき大將	正破	2	0	0			0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	10			14	87.5	16		
	破	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1			1	2	12.5			
八重葎	正破	4	0	0			0	1	0	3	0	0	1	0	2	0	0	2	14		27	79.4	34		
	破	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0			2	7	20.6			
兵部御物語	正破	6	0	0			0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1			8	53.3	15		
	破	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0			5	7	46.7			
雲隠六帖	正破	0	0	0			0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	4			5	50.0	10		
	破	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0			3	5		50.0	
松陰中納言物語	正破	0	0	0			0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0			1	50.0	2		
	破	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			0	1	50.0			
夢の通ひ路	正破	20	0	0			0	1	0	0	0	1	4	0	0	1	1	28			57	46.3	123		
	破	4	0	0	2	0	0	3	1	7	0	0	4	0	0	0	0			45	66	53.7			
御伽草子	正破	0	0	0			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	20			20	100.0	20		
	破	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			0	0	0			
合計	正破	87	13	0			6	10	1	18	0	1	7	0	25	2	4	16	143		333	75.5	441		
	破	8	3	0	2	1	0	3	1	7	0	0	4	0	2	0	2	1			74	108		24.5	

〈表七〉②「なむ」の語

作品	品詞	動詞・補助動詞	形容詞	形容動詞	助詞	名詞	助 動 詞													省略	消去	正破格別計	正破格比率	合計
							つ	ぬ	たり	けり	けむ	らむ	む	めり	べし	なり	ず	その他						
松浦宮物語	正破	4	6	0	0	0	0	0	0	1	1	1	7	0	1	0	1	3	5	30	88.3	34		
	破	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	4	11.7			
有明の別れ	正破	25	18	3	0	2	1	0	5	0	1	17	2	1	11	6	8	15	115	86.5	133			
	破	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	15	18	13.5				
あさらが露	正破	19	5	0	0	3	0	2	6	0	0	16	2	1	2	2	6	16	80	88.9	90			
	破	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	10	11.1				
風につれなき	正破	6	3	0	0	1	2	0	1	1	0	5	0	1	1	1	3	6	31	75.6	41			
	破	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	10	24.4				
我身にたどる姫君	正破	32	21	0	0	2	1	0	8	4	3	27	5	0	3	5	6	30	147	80.3	183			
	破	0	1	0	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	32	36	19.7				
山路の露	正破	7	9	0	0	4	1	0	4	1	0	3	0	1	1	2	3	10	46	82.1	56			
	破	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	7	10	17.9				
風に紅葉	正破	19	3	0	0	0	1	1	4	0	1	11	1	0	1	3	7	23	75	81.5	92			
	破	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	16	17	18.5				
恋路ゆかしき人絆	正破	11	15	3	0	4	0	0	13	2	2	29	12	1	5	3	2	26	128	81.0	158			
	破	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2	26	30	19.0				
八重葎	正破	16	2	0	0	1	1	0	6	0	0	15	3	2	2	1	5	10	64	87.7	73			
	破	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	7	9	12.3				
兵部御物語	正破	3	0	0	0	0	0	0	0	0	1	5	0	0	1	0	0	6	16	44.4	36			
	破	1	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	17	20	55.6				
雲隠六帖	正破	3	0	0	0	0	0	0	1	2	0	5	0	0	1	0	3	10	25	86.2	29			
	破	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	2	4	13.8				
松陰中納言物語	正破	69	12	0	0	26	1	0	6	0	13	43	4	10	24	7	11	135	361	90.0	401			
	破	2	0	0	3	0	0	0	1	0	3	5	0	0	3	0	2	21	40	10.0				
夢の通り路	正破	33	17	1	0	1	0	0	3	0	9	40	0	3	3	5	15	71	201	67.0	300			
	破	6	0	0	14	0	0	0	2	3	6	17	1	1	1	0	2	46	99	33.0				
御伽草子	正破	37	26	13	0	3	1	6	22	0	3	3	0	5	5	2	4	11	141	57.1	247			
	破	6	0	2	6	1	0	3	33	0	4	6	0	5	5	1	1	33	106	42.9				
合 計	正破	284	137	20	0	47	9	9	80	11	34	226	29	26	60	38	76	374	1460	100.0	1873			
	破	16	1	2	28	1	0	0	4	40	4	13	29	2	9	9	1	10	244	413				

表七 ③ 「こそ」の結び

室町期の成立かとされる『雲隠六帖』や、室町時代の作とされる『夢の通ひ路物語』と、その割合はほぼ同程度である。一方「こそ」については、正格が九割を占め、この数値だけを見れば、鎌倉期の物語としてはむしろ高いといえる。しかしその内容をみれば、他の物語において破格の大部分を占めている「消去」が、この物語においては非常に少なくなっており、それが破格を低率に抑えた要因となったものと考えられる。本書は一文が比較的短く、その為に結びが「消去」されることも少なかったであろう。一方、結びの破格をとる助動詞は、他の物語に比べて多種に渡っており、やはり、「こそ」についても、正格の比率こそ高いものの、他の二助詞の場合と同様、結びに乱れが生じているといえる。

さらに注目すべきは、破格の生じた助動詞の種類である。山田曉子氏は、断定性の強い助動詞が「こそ」の結びとなる場合には、破格が現われ難いことを指摘され、『今昔物語』に関する調査において、破格の見られない例として、「なり」等数種の助動詞を示された。また、田村ゆかり氏も、天草コレデオ版『平家物語』『伊曽保物語』の口訳本と『金句集』との三都合綴ローマ字本についての調査で、「こそ」に対する結びの助動詞「なり」には破格の例が無い、としておられる。これらのこ

とから、中世においては、少なくとも「こそいなれ」という呼応関係は保たれていたらしいことが解るのであるが、『松陰中納言物語』においては、「こそ」に対応する「なり」二七例中、次の二例に破格が生じている。

○「おまへの御あそびこそおもしろくさぶらふなり。かいま見せさせ給へ」(一六頁二行目)

○「我もあやしくこそおほへさぶらふなり」(五七頁二行目)

私の調査した範圍の作品では、『夢の通ひ路物語』と御伽草子に同種の破格が見えるものの、それ以前の作品には、こうした呼応の崩れは見られないのであり、これは注目すべき点であるといえよう。文語において、いつ頃から「こそいなれ」の呼応関係が乱れ初めたのか、その時期は確定し難いが、山田氏は、仮名草子においてはこの両者の関係にも崩れが生じていることを指摘されており、遅くとも江戸初期にはそうした現象が現われていたといえる。その上限を絞るには、より多くの資料にあたって検討を重ねるべきであるが、前述のようなキリシタン資料にもその例が見られないことを考えれば、到底鎌倉末や南北朝期にまでは遡り得ないのではなからうか。

以上述べたように、本書の文体について係結びの面から考察

を加えると、「こそ」の用例の多さや、その結びの乱れからみて、室町期の『夢の通ひ路物語』や江戸初期の仮名草子に近い性質が感じられるのである。

(注一) 松島典雄氏『仮名草子の文末表現——笑話本の付屬語——』

(福井大学『国語国文学』第一九号、昭51)

(注二) 『岩波講座日本文学』、『日本文学書目解説』(三)鎌倉時代

(下)

(注三) 辛島正雄氏『兵部卿物語』の成立時期をめぐって(『文献探究』第一三号、昭58・12)

(注四) 本稿「一、文末の助動詞について」の(表二)参照。

(注五) この物語においては、主人公兵部卿官に「申し上げる」意で「奏す」「密す」がそれぞれ一例用いられている。

(注六) 山田鏡子氏『コソ…已然形』における呼応意識の変遷(『成文国文』4号)

(注七) 田村ゆかり氏「中世における係り結びの一考察——呼応忘却とその要因——」(『国文自由』15号)

(注八) (注七)参照。

### 三 已然形終止について

本物語には、

○「いかなる事ともわきまへさぶらはねども、とくめまいら

すべきよしおほせ事にてさぶらへ」(二五頁一〇行目)

のように、係助詞「こそ」なくして已然形で文を終止した例が多く見られ、一つの特徴となっている。こうした「係無し已然形終止」の文(以下、已然形終止と称す)は、近世における仮名草子や、上田秋成の擬古文等に多く見えることがすでに指摘されているが、それ以前の、特に中古・中世の王朝物語における例については、単なる誤写或いはケアレミスとして、従来の研究ではその存在すら取り上げられなかったようである。しかし、それら王朝物語における已然形終止を詳細に調査してみると、その用例数は多く、しかも用いられる場が限られているのであり、それらを全て誤写等として顧みないのは如何かと思われる。

そこで、かかる表現がいつ頃から生まれ、どのように用いられていたのか、主に物語における歴史的流れを明らかにし、その上に立って本書の成立について考えてみたい。

さて、前述のように、已然形終止が多く見られる代表的な例として、近世の擬古文等があげられるのであるが、中村幸彦氏は、日本古典文学大系(岩波書店刊)『上田秋成集』の補注において、秋成の文章に見える已然形終止について、次のように説明された。

○万葉集一「古の人に我あれや(中略)見れば悲しき」(三二)、同「大船を荒海に漕ぎ出でや船たけ吾が見し子らがまみは著しも」(二二六六)の如きは、「ば」「ども」などの条件句を作る助詞をとまわらないで、その意味を持つと解されている。(中略)秋成もこの文法を知っていて、用いたであろう。(中略)従来この文法を知っていて、用いたのであるが、今回は全部条件法的に解することにした。

しかし、近世初期にはかなり広く説まれていたとされる仮名草子『伊曾保物語』には、

○これいみじき御大事にて候へ。たやすく申へきことにあらず。(岩波日本古典文学大系『假名草子集』三七三頁四行目)

○いかに庭鳥殿、御邊の父御とはしたしく申承候ぬ。この後は御邊とも申承はらめ」といひければ、(同右四三四頁七行目)

のように、条件法として解釈し得るものとそうでないものとが混在しており、たとえ秋成の文章における例が全て前者にあてはまったとしても、こうした他の作品に見える已然形終止法との関連を全く否定し得るのかどうか、問題であろう。従って、

本稿ではこの両者を一括して「已然形終止」として扱うことにする。

さて、この已然形終止の歴史については、和歌と消息文を中心にした安田章氏の御研究<sup>(二)</sup>があり、それをまとめさせていただと、以下のようなになる。

①私家集等の用例の調査により、和歌における已然形終止は、中世にはいつて一般化した連体形終止法に代替する表現形式として、鎌倉時代という模索期を経て、室町時代に確立したものであらうと推定される。

②中世の散文には稀であるものの、『八幡愚童訓』などに見え、このことから、この表現形式が和歌だけのものではなかったことがわかる。

③平安時代の仮名書状に用例が見えることから、この表現形式はその頃には存在したと考えられる。

④以上①と③により、已然形終止は「個人に関わる書き言葉」の世界で生まれ、一時には書状以外の書きことばにも現われ、和歌に収束することになって行ったと考えられる。

さて、ここで問題となるのは、安田氏の言われるところの「書状以外の書きことば」に当たる物語文学において、こうし

た表現形式がいつ頃から現われ、どのように用いられたのか、ということである。具体例を挙げつつ考察して行きたい。

中村氏によって指摘されたように、条件法としての已然形終止は、古くから存在するのであるが、物語においても、『落窪物語』に、

○「おとどこそ。この落窪の君、心の愛敬あひやうなく見わづらひぬれ、これいましてのたまへ。(後略)」（小学館日本古典文学全集 一四五頁一〇行目）

の一例が見えるほか、前期物語に散見される。しかし、それ以外の、強調或いは余韻余情といわれる用法も現われたのは平安後期になってからのようであり、『浜松中納言物語』には、

○うべこそ「山がくれなどに隠かくろへて、中く／＼さてもありぬべき人はあらめ」と言ひけれ。(岩波古典文学大系 三八六頁九行目)

といった例が見える。また、『夜の寝覚』には八例、「とりかへばや物語」に五例、『有明の別れ』にも一例の已然形終止が見えるのである。

以上掲げた作品は、近世にはいつてからの写本しか現存せず、厳密に言えは用例として認めるのは危険であるが、その用例数などから見て、全てが後世の誤写や改変であるとは考え難い。

従って、物語においても、已然形終止は平安末期頃には存在したと見て、まず差支えないであろう。故に、こうした語法自体は、物語の長い歴史から見れば、まして新しいものでも、また特殊なものでもなかったと言える。

それでは、そうした物語における已然形終止は、どのような場面に用いられたのであろうか。それらの用例の属する場面を、会話・心中思惟・和歌・消息文・地の文の五種に分類して示したのが△表八▽である。

さて、この表を見ると、已然形終止の用いられる場面には、かなり偏りのあったことが理解される。即ち、この表現手法は、会話文や心中思惟には多く現われるが、地の文には殆んど行われていないのである。なお、和歌や消息文にも少ないが、物語文章中にそれらの占める割合自体が少ないことを考えれば、さして問題とはならないであろう。地の文に已然形終止が現われ難かった、という事実は、一二八例もの已然形終止文を有する『夢の通ひ路物語』においてさえ、一例も地の文に現われていないことから、十分理解されよう。

このことから、中古中世の物語作者の間では、已然形終止は「書きことば」ではなく「話しことば」である、といった意識が強く働いていたらしいと推測される。安田氏は、前述のよう

〔表八〕

作品	場面	会話文	心中思惟	和歌	消息文	地の文	合計
夜の寝覚		5	3	0	0	0	8
浜松中納言物語		1	0	0	0	0	1
有明の別れ		0	1	0	0	0	1
とりかへばや物語		5	0	0	0	0	5
石清水物語		1	0	0	0	0	1
山路の露		0	1	0	0	0	1
兵部御物語		0	0	0	1	0	1
白露		0	1	0	0	0	1
錦木物語		5	1	0	0	3	9
雲隠六帖		4	1	0	0	0	5
松陰中納言物語		38	3	0	1	4	46
夢の通ひ路		71	53	2	2	0	128
御伽草子		3	1	0	0	1	5
合計		133	65	2	4	8	212

に、仮名書状や和歌の例から、この表現方法を「書きことば」であるとされ、

○所詮は個人に属し、公よりも私、暗よりも藝の色彩を濃く持つ意味において、已然形終止を許容する基盤があったと思われる。

と述べておられる。しかしながら、物語における前のような現われ方を見ると、已然形終止に口語性を認めざるを得ない。むしろ、「話しことば」であったからこそ、「個人対個人の、対話にも比すべき書状」に用いられたのではなからうか。

さて、この表で見る限り、已然形終止は、当初会話や心中思惟に用いられ、時代が下ると地の文にも用いられるようになってきた。話しことばであったはずの已然形終止が、何故このように地の文に現われるようになったのであろうか。

和歌における已然形終止は、安田氏の御指摘によれば、「こそ已然形」の強調要素を欠くバリエーションであり、その効果は強調ではなく余情であった。ところが、物語における例を検討すると、特に平安期のものにおいては、むしろ強調表現に属すると思われる例が多い。「夜の寝覚」においては、そうした傾向が特に明確である。この物語には、

①「おぼしたる御心焦<sup>あせ</sup>られのままに、さもおぼし立ちぬべかめれ、と思ふ、人間<sup>ひと</sup>もいとうたて。……」おぼし乱れて、

（小学館日本古典文学全集、二一四頁三行目。…は省略を

示す、以下同然。)

② 「…いかで、名高うきこえ侍る気配、有様ばかり、見たまへまほしけれ」(二七四頁二行目)

③ 「…ありつき、心にくくもてなしてはべるめれ」(二八八頁二三行目)

④ 「恋しき昔の形見とも思ひて、渡るたびごとに消息きこゆれ。…」(二九五頁二行目)

⑤ 「…そのなかを分けて、我がかたぎまの心寄せは、いとあはれなりしか」と思ふに、(三五八頁十行目)

⑥ 「…深く脈ひ出づる心ばへの、めづらかに心愛けれ」と、登花殿に渡らせたまふ」(三五九頁一三行目)

⑦ 「…いとなく、月ごろのやうに、人目には見えであらめ」とおぼせば、(三六九頁八行目)

⑧ 「…大臣の契りさへうらやましく、妬けれ」と、御涙をさへ惜します」(四五二頁六行目)

の八例の已然形終止が見えるが、このうち②③は、美貌の噂高い寝覚の上を、帝が一目見たいと母大皇の宮にせがむ場面であり、④は、帝が寝覚の上のもとに忍び入ってかきくどく場面、また⑥は、冷淡な寝覚の上を帝が非難した言葉、⑧は、寝覚の上と相思相愛の仲である内大臣を誅した帝の言葉である。これ

らは全て、話者の感情が高ぶっている場面に効果的に現われており、かなり強調の度合の高い表現であると思われる。また、①も中君と大君の間で苦しむ男君の心中を表わしたもので、同じく強調表現であると考えてよいであろう。

また、「有明の別れ」の

○日頃いとかうしも思ひきこえざりつれ」と、たちもやられずぞむせかへらるる。(昭54創英社刊、四一四頁二三行目)

に見える強調表現も、前と同様、その度合の高いものである。

このように、平安物語に見える已然形終止には、古くからある条件法に加えて、「コソ」已然形」の場合と同様、強調としての用法が認められるのであり、しかもそうした用法の場合には、「コソ」已然形」よりも、強調の度合は高いものであったと考えられる。

ところが、鎌倉以後の物語になると、それ以前によく見られた高い程度の強調表現は少なくなり、かわって、

○「はや、むろも近けれ」とい、わたるにぞ、(福武書店刊『夢の通ひ路物語』一四〇頁三行目)

○人、雨ふりはべらめ」ときこゆるに、(同右、二〇二頁一四行目)

などのように、およそ感情とは無縁な所で用いられた例が現わ



れてくるのである。「松陰中納言物語」においてもそうした傾向が見られ、

○「…あざら大式などもつませんことをおもひたまふるなれど、折からもありぬべければ、それまではおもひゆるし給ふべかめれ」（二六一頁六行目）

などのように、単なる判断を語る場合に已然形終止が用いられており、こうした場面における已然形終止は、前代に比べれば、その表現効果の上に果たす役割が低下していると言えよう。

このように、強調表現としての已然形終止は、後代になるとその本来の力を失っていったものと考えられるが、そのことは即ち、その持つ主観的性質の後退ということにもなる。客観的な表現に用いられるようになった已然形終止は、「話しことば」としての性質を弱めていったのである。

その主観的性質の強さ、即ち口語的な性質の故に、本来、地の文に用いられることのなかった已然形終止は、以上述べたような性質の変化を経て、「書きことば」にも受け入れられるようになったのではなからうか。

近世の作品における已然形終止、例えば秋成の「雨月物語」地の文に見える、

○たまたまここかしこに残る家に人の住とは見ゆるもあれど、

昔には似つつもあらね。（巻二、浅茅が宿）

などについては、従来、俳句の方面からの影響<sup>二〇</sup>であるとか、「話しことばの反映というより、より人工的に古めかしきを出そうとした結果、生まれた」、「人工的な文語めかし」<sup>二一</sup>であるといった説明がなされてきたようであるが、物語における前述のような歴史から見れば、近世におけるこうした例も、物語文章の伝統の上に立った、ある意味で「正しい」表現方法であったといえるであろう。強調の度合が当初に比較して緩んだとはいえ、已然形終止がその基に有するところのそうした性質を、効果的に地の文に用いたものであると解されるのである。

さて、「松陰中納言物語」には、△表八▽に掲げたように、已然形終止の地の文が四例見えるので、次に示す。

○露は朝日にきら／＼とにはひわたりて、色々さける花のうへに、玉をこぼしかけたらんやうにいとおかしく見ゆれ。

（八頁三行目）

○見やりの山には紅葉々の色ことなるに、霜のしろくをきけるは、何にてか染つらむと思ひやらるれ。（八頁四行目）

○水鳥のむまれきにけるにやと、さきの世の事までおもひやらるれ。（三三頁八行目）

○まことによるこびけるさまのと／＼なるは、後の世のつ

ともなりぬべけれ。(一三六頁五行目)

現存諸本を校合しても、当該箇所との異同はなく、已然形終止について、前に述べたような表現効果の変化を考え得るとすれば、本書に見えるこうした例は、その成立時期を考える上に重要な手掛かりになると思われる。

それでは、已然形終止が物語地の文に現われるようになったのは、具体的にいつ頃であろうか。

私の調査した範圍では、本書以外に地の文にこうした例が見えるのは、『錦木物語』の

○しやうくんな、めならずよろこひおほしめし、いそぎ御上  
らくまし／＼けれ。(古典文庫第三一四冊、二五五頁六行  
目)

○へつたうをはしめすみそめのそてをぬらされけれ。(同右、

二八七頁四行目)

等三例、並びに、御伽草子『木幡狐』の一例、

○夜もやうやうふければ、舞鶴の衾の下に戯れけれ。

(小学館日本古典文学全集『御伽草子集』一八九頁一五行

目)

のみである。『錦木物語』の成立については、伊井春樹氏が、

○この物語の成立については、まだ確たることは言えないが、

内容的には南北朝期あたりであろうか。

としておられるものの、阿部好臣氏はその説に対して「問題が残る」として、「成立に擬作の疑いが残るか」と述べておられ、また松本寧至氏は、古典文庫の解説で「慶安前後」であろうとしておられる。従って、この作品を中世のものとして扱ふこと自体、危険であるかも知れない。一方『木幡狐』は、洪川版として出版された本文であるから、「おそくとも江戸時代の中期までに」広く読まれていたと言われるものである。

このほかに、安田氏が前掲論文において、中世散文に見える例として、『八幡盛童訓』の二例を示しておられ、これをそのまま用いければ、中世には既に地の文に已然形終止が現われていたと考えられるが、あくまで純粹な「書きことば」であろうとする物語の文章と、縁起物の系列に属する語り物的なこの作品の文章とを同一の次元で考えることは避けるべきであろう。

「語り物」としての性格を持つ文章には、当然「話しことば」である已然形終止を受け入れ易い素地があったと考えられるからである。王朝物語と軍記物の性質を併せ持つとされる『錦木物語』の地の文に已然形終止が見えるのも、あるいはそうした事情によるものであろうか。

また、森田武氏が、岩波古典文学大系『假名草子集』の解説

において、江戸初期に刊行された『伊曾保物語』に見える已然形終止七例の存在を指摘しておられるが、その中、

○又けだもの<sup>の</sup>陳<sup>に</sup>押し寄せ、このたびは鳥<sup>の</sup>軍<sup>よ</sup>かかんめれ、たがひに和睦<sup>して</sup>んげり。(四二四頁三行目)

○そのごとく、人としてわが唇<sup>を</sup>さぐる時は、人の情<sup>を</sup>かむりて、果てにはあやまりをいひ出<sup>さ</sup>る、物<sup>なり</sup>けれ。(四五四頁一四行目)

の二例は、地の文に用いられたものである。前に述べた御伽草子の例等も併せ考えれば、室町末と江戸初期頃には、既に物語地の文において已然形終止が行なわれていたと見て差支えないであろう。

以上のように、物語の分野における已然形終止の使用開始時期については、その下限を近世初期とし得るのみで、上限については確たる論を立て得ない。しかし前述のように、室町初期の成立とされる『夢の通ひ路物語』には、地の文に已然形終止が一例も見えないことから、それ以後であるという可能性は十分考えられよう。この推測が成り立つとすれば、『松陰中納言物語』の成立が室町中期以後であるという結論に達するのであるが、当時数百編はあったとされる王朝物語の中、今日現存するものが二十数編であるという現実からすれば、或いはそれ以前

の作品の地の文にも已然形終止が用いられていたかも知れず、今の所は、本書は室町時代以後に成立した可能性が強い、とすに留めておきたい。

(注一) 安田章氏「已然形終止」(『国語国文』昭59・5)

(注二) 「秋成の特殊語法」(『重友毅著作集』第四卷「秋成の研究」、昭46・5文理書院刊)

(注三) 鈴木丹士郎氏「上田秋成の擬古文的要素」(『文芸研究』第四三集、昭38・3)

(注四) 「山岸文庫本 栗橋野物語(仮称)——解説と翻刻——」(『国文学研究資料館紀要』第五号、昭54・3) 解説。

(注五) 阿部好臣氏「栗橋野物語」(『国文学解釈と鑑賞』46巻11号、昭56・11)

(注六) 古典文庫第三一四冊「錦木物語」解説、二八頁。

### 結語

以上述べてきたように、『松陰中納言物語』の文章について、文末の助動詞、係結び已然形終止の三点から、他の物語と比較考察すると、その特徴はきわだっており、ある点では江戸擬古文と類似の特徴が認められ、またある点では仮名草子に近いような印象を受けるなど、全体から見ても、中世の物語文から近世

の擬古文へと移行する、そのちやうど過渡期ともいうべき様相を呈していると思われる。

その他にも、紙幅の都合上割愛したが、四段活用動詞に尊敬の助動詞「ます」が接続する<sup>(一)</sup>といった文法上の誤りや、大野木<sup>(二)</sup>氏によって指摘された「啓す」の誤用など、その文章は他の鎌倉物語に比較して著しい乱れが認められる。

以上の点をまとめると、『松陰中納言物語』の成立については、一部伝本の奥書に見える「建徳二年」以前であるとは考え難く、室町時代にまで下るのではないかと推定されるのである。

(注一) 本書にはこうした誤用が四一例も見られ、上接の動詞は「再く」「弾く」等一四種類に上る。

(注二) 序章(注三)参照。なお、この種の誤りは『兵部卿物語』にも見える。

(付記) 本稿は昭和六十年(一九八五年)度全国大学国語国文学会・中古文学会秋季合同大会において発表したものを、改めて加筆・修正したものです。発表当日及び後日、貴重な御教示を賜わった松本繁至、田辺俊一郎、福田秀一、宮田光の各氏に厚く御礼申し上げます。